日本医療機能評価機構認定病院
医療法人　幸生会
琵琶湖中央病院

病院だより

第 113 号
2020/6/15
令和 2 年

就任のご挨拶

4 月に２B 病棟リハビリテーション専従医として赴任いたしました武鑓豊文(たけやり)と申します。

私は､昭和55年(1980年)信州大学を卒業後、京都大学第一外科研修医となり、大学の関連病院を回りました。初めの 25 年間は外科、その後 15 年間は一般内科の診療をしてまいりました。

40 年前の外科は、消化管疾患を中心として、乳腺、甲状腺、小児外科など幅広い疾患の手術を行っていましたが、赴任先の関連病院では麻酔科医が少なく、麻酔もかなり経験できました。松江赤十字病院、公立豊岡病院、高島市民病院と、それぞれ外科の急性期の総合病院の勤務で、緊急対応で忙しく過ごしてきました。

50 才を過ぎた頃、体力の低下を感じてきて、以前から内科系の疾患治療にも興味があったので、高島市民病院勤務の 15 年前に外科医局を離れ、内科医として働いてきました。内科疾患の範囲は広く奥深い領域で、いくら勉強しても追いつきませんが、重大疾患を見逃さないように心がけてきました。糖尿病、高血圧、脂質異常などの新しい薬が多く混乱しやすいですが、使いやすい薬が増えてきた印象です。

今回、回復期リハビリテーションでの勤務を決めたのは、急性期病院では救急に追われて、じっくりできなかったことをやってみたいと思ったからです。

昨年９月に、回復期リハビリテーション病棟専従医師研修を受けました。在宅復帰率のカウント、人工股関節・骨頭術後の禁忌肢位は手術のアプローチによって異なること、など有益な知識を得ることができました。看護師、管理栄養士、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士からの講義もあり、演者は最後のスライドで医師へのお願いを出して、「リーダーシップを発揮してほしい」、「患者・家族にわかりやすい説明をしてほしい」、「疾患に応じた運動負荷制限の目安について具体的な指示がほしい」などの指摘があり、今後の診療についてのポイントが再認識できました。

今は、新型コロナ感染予防対策で、ビデオ面談、フェイスシールドなどの予防衣使用、在宅訪問の制限などがあり、身体的にも精神的にも働きにくい状況でありますが、感染予防意識はこれからも大切だと思います。

実臨床での経験を積みながら研鑽を重ね、地域の医療に貢献したいと考えています。

2B 病棟　専従医　武鑓　豊文

新人看護師あいさつ

僕は子供の頃、身体が弱く入院をしていました。入院生活は、輸液ポンプのアラーム音や注射の痛み、知らない白衣の人たちの会話、処置室に移動すれば嫌なことをされると思い、恐怖と不安との戦いでした。僕は恐怖で病室から出られませんでした。そんな時、看護師さんが優しく親身に話を聞いて下さり、病室を出て院内を一緒に周ってくださいました。それにより不安や恐怖がなくなり、将来僕も看護師として働きたいと思いました。

春から看護師として働き先輩看護師の姿を見て、業務や日々の記録、疾患に応じた処置や内服管理、患者さんへの優しい声かけなど、看護師の仕事の大変さを感じています。先輩方は親身に指導してくださるので、今は業務や記録で手一杯ですが日々学びを深め頑張っています。

今後は活躍している先輩方を目指して、患者さんがその人らしい生活を送れるように寄り添った看護を提供していきたいです。

4A 病棟　看護師　榊　尚登